

珠洲系窯の小型四耳壺について

野末浩之

1 はじめに

平安末期から鎌倉初期にかけて、日本では各地で経典を埋納した経塚または火葬骨を埋納した墳墓が盛んに築かれ、そこには容器として中国および日本各地で生産された陶磁器もしばしば使用されている。経塚に使用される中国陶磁には経筒・四耳壺・合子などがあるが、白磁四耳壺は九州から東北までの出土分布が確認され、経塚使用器種としては最も一般的なものであることもあって、経塚造営の普及に伴い日本の初期中世窯でもこれを模倣したものが生産されるようになると解釈されている。

白磁四耳壺は本来的には日常的な貯蔵用器としてのものであり、宗教関連遺跡以外でも陶片が出土しているが、多くは準専用器として経典を直接納めるための容器として、またこれと親縁的な行為とされている埋葬のための容器として機能したものであろう。このように意識的に埋納されることによって遺物としての保存状態の良好なものが多く見出される器種でもある。そして、この宗教用器的側面がこの時代の四耳壺を象徴しているといえる。こうした宗教用器としての白磁四耳壺やその他の宗教関連器種が、ちょうどそのころ台頭してきた日本の中世窯業地をして模倣せしめるのは、中世的な商品生産を前提とした生産・流通体制の基盤が整い、広域の需要に応える窯業体制が可能になったことも大きな要因として考えられる。もちろん、模倣の実態は各窯業地の成立事情や背景が異なるため一様でなく、その結果、模倣のタイプ・模倣精度は窯業地によって様々にあらわれている。

考古学的にこの問題にアプローチするには、型的・形態的な比較検討、機能面の比較、そして各窯業地の年代・技術系譜・器種構成・生産基盤の比較といった方法が考えられる。これまでいくつかの窯業地の四耳壺についてこのような考察が試みられているが、珠洲系窯の四耳壺については解説等で簡単に触れられているだけである。そこで、上のような視点を見据えながら、これまでの各窯業地の四耳壺に対する研究をふり返りつつ、珠洲系窯四耳壺について若干考えてみたい。

2 白磁四耳壺の概要

ここで、この12～13世紀にかけて日本各地で盛んに生産された四耳壺のモデルとされている白磁四耳壺の概要について平出紀男氏にしたがって見てみる。氏は日本出土の白磁四耳壺を集成し、形態分類、そして年代のおさえられる資料との対比により編年を組み立て、さらにこの分類にしたがい東山窯（猿投窯）・瀬戸窯・美濃須衛窯の四耳壺との対比を試みている。^(注2)

これによると白磁四耳壺は大きくⅠ・Ⅱ類に分けられ、さらにⅠ類はA～Eの5類、Ⅱ類はA～Cの3類に細分される。Ⅰ-A類が胴部に縦に櫛目分割を施し、薄い器壁の削り込み高台をなす、この類の四耳壺の中でも明らかに古式とみられる形態を示すが、Ⅰ-B類以降、口頸部は長頸化・外反化の方向へ、そして肩が張り、底部付近で器壁が厚くなる過程を示す。Ⅱ類は腰部が締まって長胴化へと向かい、底部は肉厚のいわゆる竹節高台をなす。これら白磁四耳壺に共通する特徴としては、口縁部がほとんどの場合折れ曲がり、耳は板状で線刻を横位に数本入れている。

高台は削り込み、または削り出しによる。以上各分類の編年による比定実年代は別掲消長表のように考えられている。

こうして12～14世紀にかけ舶載された白磁四耳壺の使用形態であるが、経塚・墳墓蔵骨器・寺院といった宗教的性格のものが半数を占め、官衙・集落などからも出土している。また、その出土分布状況から使用階層として貴族・僧侶・在地領主・新興武士層が想定されている。

3 各窯業地における四耳壺の概要

〔猿投窯〕

(注3)

猿投窯における四耳壺生産窯は、東山地区においてH-G-101、NN-G-65、八事裏山A・B・Cの各窯が確認されている。完器も数例知られているが、いずれも出土地は未詳である。

猿投窯東山地区は12世紀第2四半期という早い段階から四耳壺を生産しているが、いわゆる三筋文や線刻による牡丹文・樹文など、猿投窯が無釉化した段階から新たに製品に付された意味を四耳壺も同時にまわっていることに特徴がある。白磁四耳壺との比較で見れば、口縁端部を垂直に折り曲げた頸の短い個体で、白磁四耳壺の平出分類I-A～C類にみられる形態と類似するものがみられる(NN-G-65、八事裏山窯)が、三筋文や耳の形態、肩の張り、付高台など、細かにみれば異なる点も多い。H-G-101窯になると、口縁部は折り曲げず反して、端部をつまみ出してシャープに造り上げており、もはや白磁四耳壺の口縁部には類似せず、猿投窯としての独自の型式変化を遂げたことを窺わせる。

この猿投窯の三筋文四耳壺の出自については、白磁四耳壺の形態のみを模倣したものであり、それに別系譜からなる三筋文が付加されたものであるとする見解が大勢である。白磁四耳壺はこの時期盛んに経塚で使用されているが、三筋文四耳壺は消費遺跡からの明確な出土例がなく、使用形態がはっきりしないものの、猿投窯は経筒外容器や花瓶・香炉等の金属器模倣の密教法具も同時に焼成しており、四耳壺もまた特殊な宗教用器の一つとして製作・使用されたものであろう。この背景としては、瓦の分析から窺われるように、院政下の荘園領主、在地領主による導入が考えられるであろう。

〔美濃須衛窯〕

(注5)

美濃須衛窯においても、12世紀後半代から13世紀にかけて四耳壺を焼成していることが知られている。美濃須衛窯の四耳壺は、特に初期には口縁端部を垂直に折り曲げ、線刻入りの耳を付け、肩に沈線を施すなど、平出分類I-B・D類あたりに形態的に類似するところが多い。その後12世紀末以降白磁四耳壺の形態変化とは異なる方向の変遷を示す。

同窯では、瀬戸窯と同様に施釉の瓶子・水注等を焼成していて、瀬戸窯との関連が注目されるが、四耳壺について白磁四耳壺の編年に対比させると、同窯の方が形態的には古式に相当しており、したがって施釉技術の系譜とは別の系譜によって成立したものである。これはすでに指摘されているように、模倣の対象となる白磁四耳壺が美濃須衛窯では北宋代のもの、瀬戸窯では南宋代のものという違いによるものとされている。また、時期的にはすでに猿投窯で四耳壺の生産を開始しているが、三筋文はなく、耳の形態も異なるなど、猿投窯からの連繋でもなく、その的確さはむしろ白磁四耳壺を直接のモデルとしたためのように思われる。

出土地についてみると、生産地である須衛1号窯跡以外は経塚や墳墓での使用が目立っており、

やはり白磁四耳壺と同様の使用形態であることが知られる。

〔瀬戸窯〕
(注6)

瀬戸窯においては、四耳壺は12世紀第4四半期のいわゆる古瀬戸様式成立期にはすでに生産されており、灰釉が施される。瀬戸窯ではそれ以前にも、猿投窯製品にみられるような耳形態や三筋文ふうの沈線をもつ無釉のものが若干焼成されているが、このような特徴をもつものは古瀬戸様式成立前後の短い期間に限ってみられるものである。しかし、その後の生産の主流となる四耳壺はそれとは異なり、耳はへらまたは型による沈線・突線が入り、胴部は無文、口頸部は直線的に開き、張り気味の肩から僅かに膨らみつつすばまり底部に至るといふ、全体の形状からみれば白磁四耳壺平出分類Ⅰ-E類からⅡ-A類あたりに近い形態のものである。口縁部は折り返され、頸部と密着するものとそうではないものがあるが、玉縁状口縁を意識したものになっており、また口頸部が直線的なのに対し、白磁四耳壺の方はあくまで口頸部を折り曲げ、外反する点でやや異なっている。

瀬戸窯での出現時点ですでに猿投窯や美濃須衛窯において四耳壺は生産されており、後発になるわけであるが、古瀬戸様式成立前後の一部製品を除き、そうした先行窯からの影響は見受けがたく、モデルとしたのはこの時期の白磁四耳壺であるかのようなのである。施釉陶生産にあたりこの時期の白磁四耳壺を手本とするが、それは契機的なものにすぎず、常に時代の形態を模倣しているわけではなく、瀬戸窯において独自の展開をしている。

瀬戸窯の四耳壺は時代的に下ることもあるが、経塚築造の最盛期と時代的に並行する期間があるにもかかわらず、経塚での使用例をほとんど見ず、墳墓等において蔵骨器として最終的に使用される例が圧倒的である。この点、経塚・墳墓ともに使用される白磁や常滑・渥美・珠洲窯製品と対照的であり、瀬戸窯製品のこうしたあり方は何らかの規制を反映し、武士階級などの需要に応ずる形での蔵骨器としての計画的生産とも考えられている。

〔常滑窯〕
(注7)

常滑窯においては四耳壺は極めて少量であり、時代的にも18世紀にまで下る。瀬戸窯灰釉四耳壺をモデルとしたらしい数例を除けば、形態的には白磁四耳壺を模倣したとは言いがたいものである。通有の高さ20cm台のものをとってみても、口縁部・耳部・底部（無高台）とも白磁製品とはかけ離れており、むしろ、12世紀前葉から盛んに生産された三筋壺に簡単な耳を取り付けたものとみる方が妥当である。

常滑窯は猿投窯から分派して展開し、ともに三筋文を使用している点で共通しているが、器種構成からみれば大きく様変わりをしている。三筋文系陶器が猿投窯では密教法具を中心に豊富な器種に施され、宗教用器の色彩が強いのにに対し、常滑窯においてはいわゆる三筋壺のみにとどまっており、またその他の宗教用器も極めて乏しい。この三筋壺も研究史上、白磁四耳壺に起源を求め、耳と高台を省略した形とする見方がされている。しかし、こうした点を考えてみれば、三筋壺が経塚・墳墓での使用がほとんどとはいえあくまで日常用器であり、それは宗教容器的色彩の強い中国陶磁を模倣したというよりは、猿投窯の器種をさらに受け継いだ特産品的器種と考えられる。

〔その他〕

その他、標準タイプの法量の四（三）耳壺としては、渥美窯・丹波窯・緑風台窯・亀山窯・信
(注8) (注9) (注10) (注11)

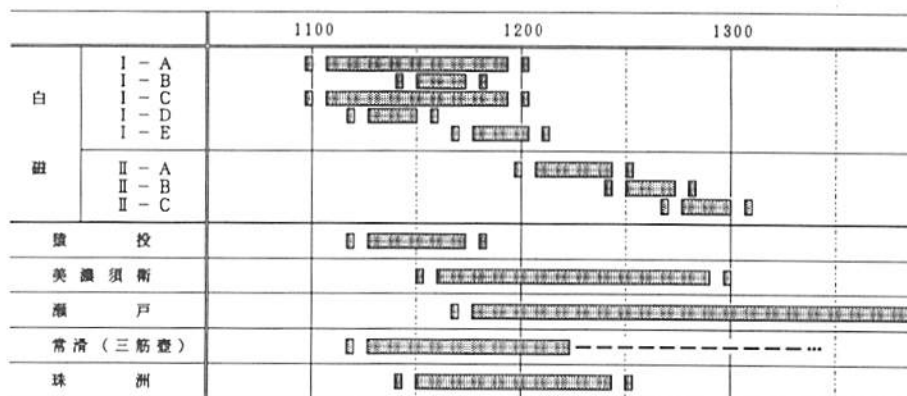
楽窯にもみることができる。

(注2)
 渥美窯のものは、岐阜県谷汲村横蔵寺裏山出土の袈裟禪文三耳壺の1点だが、縦型の紐状耳が付くことを除けば、口縁形態・袈裟禪文とも渥美窯に一般的なタイプの壺を小型化しただけのものといつてよい。渥美窯の場合、経塚使用器種からみれば、三筋壺はまるで経筒外容器を焼成している点で、ちょうど常滑窯とは逆の構成となっている。全体的に猿投窯に近い器種構成を示しはするが、白磁四耳壺を模倣した様子は上の例からは窺うことはできない。

丹羽窯は出土地未詳の12世紀後半代とされる菊文三耳壺がある。細身で口頸部も細く、単純に外反するのみである。耳は猿投ふうだが、分厚く作られ、すき間をほとんどあけずに付けられており、退化した形態といえる。高台はない。丹波・三本峠北窯ではこれとは異なる形態の耳の付いた肩部片も出土している。その他同窯では様々な線刻を施した陶片を出土し、また丹波製品中に三筋壺も存在するなど、東海の瓷器系窯の影響が認められる。その意味では間接的にせよ白磁四耳壺を模倣しているわけだが、意匠・形態からみて違いが大きく、そのような捉え方は当を得ていないと思われる。

次に、兵庫県西脇市の緑風台窯跡から完器2点他の四耳壺が出土している。同窯も瓷器系窯の一つとして知られ、12世紀後半代に比定されている。口頸部に長短がある他は、耳形態、胴部の沈線、高台部など2点とも同じ造りである。口縁形態は端部を水平に屈折させるのみであり、白磁製品に例はない。これもやはり、東海瓷器系窯を通して散発的に製作されたものとみたい。

岡山県亀山窯は須恵器的伝統を受け継いだ中世窯とされ、極めて狭い範囲へ製品を供給している。倉敷市より亀山窯の四耳壺が出土している。耳は無文で高台もない。この他、信楽窯でも13世紀に四耳壺を焼いていたことが明らかになった。緑帯の口縁部、装飾性の強い耳形態など白磁四耳壺とはおよそかけ離れているものである。



各窯業地における四耳壺等の生産期間

4 珠洲系窯の四耳壺

(注3)
 珠洲窯の開窯は12世紀中葉頃と考えられ、甕・壺・鉢という基本3種はもとより、I・II期にはそれ以外の様々な特殊器種をも焼成している。問題の標準タイプの四耳壺はI期の寺社カメワリ坂1号窯式期から生産され、同1・2号窯から出土が報じられている。また、珠洲窯と生産技術を同じくする珠洲系窯でも生産が確認されており(秋田県茂谷沢窯)、北東日本海域において珠洲窯および珠洲系窯の製品が良好な状態で出土している(別表)。

名 称	時 代	高さ	口径	胴径	底径	所 蔵 者	備 考 ・ 文 献	
滋賀・新旭町大宝山中世墳墓	12 C					新旭町教育委員会	口頸部欠, 『近江出土の施釉陶器』近江風土記 1986	
石川・加賀市三木だいまん遺跡	13 C					加賀市教育委員会	破片, 『三木だいまん遺跡』加賀市教育委 1987	
石川・珠洲市若山町延武	13 C	20~	—	17.0	9.5	珠洲実業高校	口頸部欠, 『珠洲市史』	
石川・辰口町長滝経塚	13 C	22.3	11.4	17.1	8.5	辰口町長滝区	『珠洲古陶』石川県立郷土資料館他	
石川・内浦町白丸	12 C	23.0	11.2	17.8	8.9	内浦町郷土資料館	『珠洲古陶』石川県立郷土資料館	
石川・小松市軽海町						個人	口頸部欠, 『北陸の古陶』小松市立博物館	
富山・入善町じょうべのま遺跡						富山県埋文センター	耳・底部欠, 『じょうべのまC・K地区』1985	
新潟・加茂市青海神社経塚	12 C	20.7	—	20.2	8.8	青海神社	口頸部欠	
新潟・塩沢町大御堂経塚		23.5	10.3	18.0	8.8	個人	吉岡康暢『石川県立郷土資料館紀要』14 1985	
福島・喜多方市松野千光寺経塚	13 C前	22.2	—	18.0	8.5	個人	口頸部欠	
福島・喜多方市松野千光寺経塚	12 C末	20.5	10.3	18.0	8.5	個人	口頸部欠	
福島・会津若松市会津大塚山経塚	12 C					会津若松市教育委員会	口頸部欠, 『東北の中世陶器』東北歴史資料館 1983	
福島・新鶴村呉坪山経塚							東北歴資 1983	
福島・新鶴村館山経塚							東北歴資 1983	
山形・鶴岡市田川七日台1号墳	12 C	22.5	11.5	18.2	9.0		川崎利夫『山形県鶴岡市田川七日台の墳墓』『歴史考古』8 1962, 『庄内考古学』17・18 1980・82	
山形・鶴岡市田川七日台6号墳	12 C	24.8	12.7	19.0	8.5	(焼失)		
山形・鶴岡市田川七日台7号墳	12 C	22.3	11.7	18.5	8.8	(焼失)		
山形・酒田市城輪柵跡	12 C	22.8	10.0	18.1	8.2	致道博物館	『珠洲古陶』石川県立郷土資料館	
山形・東根市観音寺経塚	12 C	18.4	—	18.8	7.6	東京国立博物館	口頸部, 耳部欠, 吉岡『紀要』14 1985	
山形・高島町金原古墳	12 C末~13 C初	22.6	10.2	17.3	9.3	個人	東北歴資 1983	
山形・中山町滝経塚						個人	吉岡 1985	
山形・鶴岡市城の下墳墓		22.0	15.0	19.0	9.0		『庄内考古学』18 1982	
山形・鶴岡市井岡遺跡		21.0					口頸部欠, 『庄内考古学』18 1982	
秋田・ニッ井町五輪台経塚							東北歴資 1983	
秋田・ニッ井町	12 C	23.5	10.7	18.5	8.6	秋田県立博物館	耳・底部欠	
秋田・ニッ井町切石	12 C	22.2	9.7	18.0	10.3	個人	『秋田県立埋文センター研究紀要』1 1986	
秋田・大館市花岡町長森	12 C	23.8	12.1	19.4	9.9	大館市教育委員会		口縁・底部欠
秋田・大館市花岡町長森	13 C前	25.1	12.1	18.8	8.8	大館市教育委員会		埋納例
秋田・横手市閑居長根1経塚		22.0	—	18.6	8.8	個人	埋納例	
秋田・羽後町高寺						個人	口唇部欠, 吉岡 1985	
秋田・平鹿町						個人	口頸部欠, 東北歴資 1983	
青森・浪岡町源常平	13 C					個人	口頸欠有, 耳欠, 東北歴資 1983	
青森・田舎館村	13 C					個人	東北歴資 1983	
青森・平賀町杉館						個人	口頸部欠, 東北歴資 1983	
不詳	12 C	26.0	12.4	20.5	9.0	個人	吉岡 1985	
不詳	12 C	26.0	12.0	17.0	8.0	愛知県陶磁資料館	『珠洲の名陶』1989	
不詳	12 C	22.5	11.0	16.6	9.5	愛知県陶磁資料館	『愛知県陶磁資料館所蔵品図録』1988	
							刻文, 『同上』	

珠洲系窯の主な小型四耳壺

図1・2は愛知県陶磁資料館所蔵の出土地未詳の四耳壺である。1は紐土巻上げロクロ成形で、無高台の底面には左回転ロクロによる糸切り痕がみられる。口頸部は基部より端部の方がややすぼまり、口縁部は玉縁状をなす。耳は無文の板状で、両端を押さえつけて肩に密着させ頂部を摘みあげるようにしている。耳の間1箇所「い戊」かと判読される刻文を施し、最大胴径部に6mm当たり5条の非常に細かく幅の狭い櫛目を、長波長・小振幅に施している。このような櫛目文は極めて少ないが、胎土・焼成状態とも典型的な珠洲窯製品といってよい。

一方2は、やはり紐土巻上げロクロ成形によるが、底面は右回転ロクロによる糸切り痕がみられ、1とは逆回転となっている。口縁部は端部で大きく外反し、端面のヨコナデにより先端が折り返し気味になっている。耳は無文板状であるが、頂部を挟みつけて幅を狭くしている。胴部には波長の割に振幅の極めて大きな櫛目波状文を施し、その原体は1条当たり2mmで12条前後である。このような櫛目文は、珠洲系窯産のものも相当数含まれると思われる東北地方出土の四耳壺に多くみられるものである。焼成状態がやや軟質なことあってもか器肌が荒れていて、暗青灰色の胎土に3～5mm大の小石が多く露われている。なお、本資料は吉岡康暢氏によれば、東北の珠洲系窯産とされている。

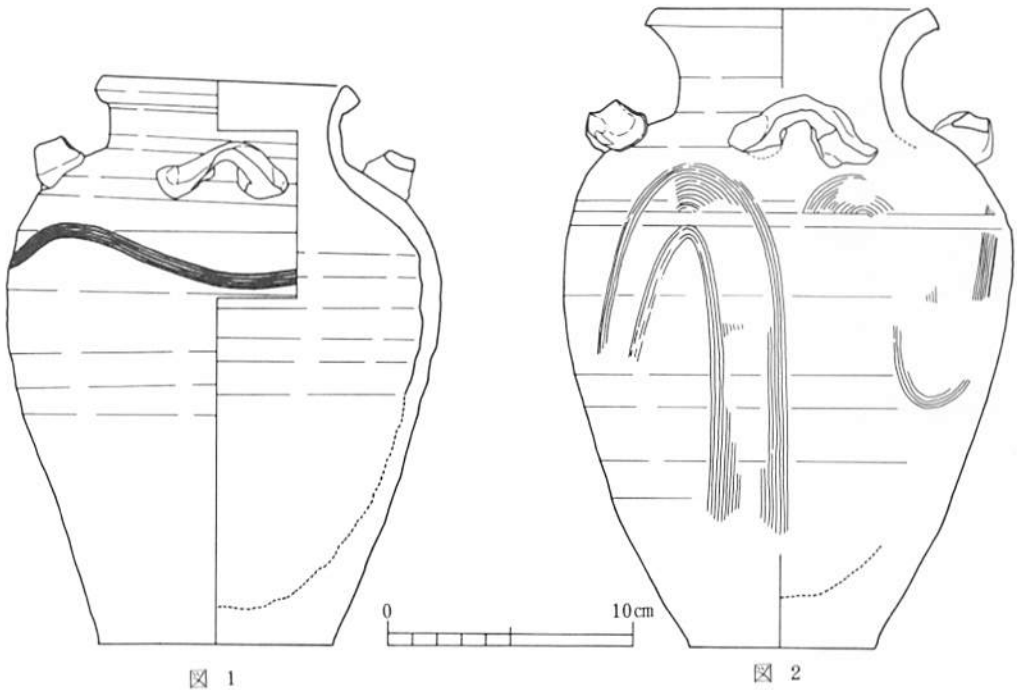


図 1

図 2

以上の2例は、珠洲窯および珠洲系窯の四耳壺の典型的なものと考えて示したわけであるが、基本的な形制は同じであり、以下珠洲系窯として一括して取り扱うことにする。珠洲系窯の四耳壺の口縁部はおおむね直線的に外反し、端部は面を作るもの、玉縁ないしは縁帯状になるもの、円頭状のものなどがある。耳はいずれも無文で、胴部には櫛目波状文が施されるものが多いが、その形態には様々なものがある。底部には高台は付かず糸切り痕が残るものが多い。

さて、この珠洲系窯の四耳壺の研究史をふり返ってみると、その出自は他の中世窯にみられる四耳壺の多くと同様、白磁四耳壺に求められている。また、さらに踏みこんで、平底形態や楕円波状文を中国産褐釉四耳壺に起源を求め、これを直接模倣、ないしはこれと白磁四耳壺を合成的に模倣した可能性も考えられている^(注4)。しかし、細部にわたって比較してみると、上に述べたような珠洲系窯四耳壺の特徴は、いずれも白磁四耳壺にはみられないものである。あえて類例を求めるとするならば、図1にみられるようなすぼまり気味の口頸部や平底ふうの底部（実際は削り込み高台）と言う点で、平出分類Ⅰ-A類が挙げられよう。しかし、口縁部・耳部の形態で比較すると、むしろ12世紀前半代の褐釉四耳壺の方に類似しているといえよう。佐賀県水梨経塚や福岡県松田経塚（大治2年（1127）銘銅製経筒共伴）出土の褐釉四耳壺は倒卵形の平底または削り込み高台で、耳下部に沈線による波状文が施されている。また水梨例は口縁部を水平に屈折させるだけという点でやや異なるが、すぼまり気味の短い口頸部で、両端を押えるだけの頂部幅の狭い無文の耳を付けるところなど、現象面では白磁四耳壺よりも共通する部分が多い。ただ白磁四耳壺が汎日本的な出土がみられ、当地域へも流入しているのに対し、褐釉四耳壺は九州を中心とする西日本でしか確認されておらず、模倣を補強する要素とならない。吉岡氏によれば、当地域は日常の貯蔵器たる褐釉系陶磁の流通圏外にあり、白磁四耳壺が高級品として受け入れられているという。さらに、珠洲（系）四耳壺はこの白磁四耳壺（ないし褐釉四耳壺）に代わるものとして認識されたとしている^(注6)。ここでは、不確定な要素もあるが、現時点では珠洲系窯の四耳壺が模倣したのは中国陶磁の中でも褐釉四耳壺の一部である可能性がより強いことを指摘しておく。

珠洲系窯四耳壺の使用形態は白磁四耳壺と同様経塚使用が多く、また埋納されていたかのように形をとどめるものの出土状況の不明確なものも少なくない。墳墓出土のものも報じられているが、当地域での経塚と墳墓の両遺構の類似性が指摘されており、必ずしも明確とはいえない。これらは型式編年に対比させるとⅠ・Ⅱ期に該当しており、経塚築造の盛衰と歩調を合わせるかのようである。ただし、珠洲系窯においては同種の無耳の小型壺も初期から継続生産し、経塚・墳墓の別なく使用されているため、使用形態の特殊性は抽出できない。

珠洲系窯製品の中で経塚または墳墓に使用される器種としては（広口）壺が多く、鉢が蓋として、まれに甕、そして四耳壺または無耳の小型壺があり、加えて円筒形の専用器である経筒外容器がある。このうち基本3種は主産品である日常雑器の転用であり、小型の壺類は準専用器と考える。準専用器と専用器の器種構成に注目してみると、東海窯器系窯では猿投窯東山地区に近い構成といえる。しかし、これまでみてきたように、珠洲系窯四耳壺は白磁四耳壺をモデルとするにはいささか疑問が残り、したがってその模倣とされる猿投窯はじめ東海窯器系窯を介しての模倣とみることに無理があろう。むしろ上に述べたように、猿投窯では最も早い時期に白磁四耳壺を模倣したとされており、珠洲系窯四耳壺の形態が最も類似しているのが褐釉四耳壺でも12世紀前半代のタイプとほぼ同時期である点で興味深い。珠洲窯に関しては、東海窯器系窯のようにより中央に密着した形での荘園領主の管掌下の経済活動という背景ではなく、在地領主（土豪の名主層）が経営主体となり広域の需要に応えるという商品生産的側面が強い。珠洲窯の器種が極めて多岐にわたり、四耳壺も白磁四耳壺の形制にとらわれていないかのような点も、こうした幅広い需要への柔軟な対応の姿とみることができると思われる。

5 おわりに

中国より輸入され、または日本で模倣された四耳壺は使用形態においてほとんど区別されることはなく、機能はほぼ同じであったとみてよいであろう。生産地による技術的な差異は当然のこととして形態的な変化に現れてくるが、同一器種をモデルとしながら模倣してできたものは生産地によりかなりの違いをみせることも否定できないであろう。そして、各生産地によってある程度規格化され、中国陶磁を忠実に写すというより、その機能を果たすことができる最低限の形態を再現することで充分であったかのような、また別の意味が作用したかのようなものに終始しているところもある。このように一口に白磁四耳壺を写したといっても、その意味は拡大解釈されている面があり、そこには技術的・精神的規制がはたらくため一律に扱うべきでないと考える。珠洲系窯でみても白磁四耳壺と比較してみた場合、むしろ「写し」とはかけ離れた面が指摘できる。ただし、現段階のように遺物としての四耳壺に対する考古学的な分析では限界があることは否定できず、今後、方法論的に新たな模索が必要かと思われる。

注1 平出紀男「白磁四耳壺について」『古代文化』35-11 1983

注2 注1に同じ

注3 注1文献他

注4 耳・胸部形態は中国産褐釉四耳壺の系譜が推測されている。柴垣勇夫「山茶碗と白磁碗について」『愛知県陶磁資料館研究紀要』4 1985

注5 吉田英敏「美濃須衛・関地区」『美濃の古陶』1976、『世界陶磁全集』3日本中世 1977

注6 藤澤良祐「南山第2号窯発掘調査報告」瀬戸市教育委員会他、同「穴田南窯址群発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』1 1983、注4文献他

注7 榎崎彰一「初期中世陶における三筋文の系譜」『名古屋大学文学部研究論集』LXXIV 1978
中野晴久「三筋壺・その造形と意味をめぐって」『常滑市民俗資料館研究紀要』IV 1990

注8 『世界陶磁全集』3日本中世 1977 他

注9 榎崎彰一編『中世陶器シリーズ 丹波』MOA美術館 1988 他

注10 『播磨・緑風台窯址』西脇市教育委員会 1983 他

注11 注8に同じ

注12 榎崎彰一編『中世陶器シリーズ 信楽』MOA美術館 1987

注13 榎崎彰一編『中世陶器シリーズ 越前・珠洲』MOA美術館 1986、吉岡康暢編『珠洲の名陶』珠洲市立珠洲焼資料館 1989、吉岡康暢「中世陶器の生産経営形態一能登・珠洲窯を中心に」『国立歴史民俗博物館研究報告』第12集 1987、同「経外容器からみた初期中世陶器の地域相」『石川県立郷土資料館紀要』第14号 1985

注14 『世界陶磁全集』12宋 1977、『日本出土の中国陶磁』東京国立博物館 1978

注15 吉岡康暢「北東日本海域における中世陶磁の流通」『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集 1989

注16 吉岡康暢「北東日本海域における中世窯業の成立」『同上』第16集 1988、注13 榎崎文献